
トッペじいさんとモモモのうさぎ

菜種油

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

トツペじいさんとモモモのうさぎ

【コード】

N3018I

【作者名】

菜種油

【あらすじ】

ちいさながけのとつつきにいる、トネリコのトツペじいさん。とつてもきむずかしやのトツペじいさんとモモモのうさぎのおはなしです。

挿絵イラスト：住良木^{すめらぎ} 大地^{だいち}さま

住良木さんにとても素敵なイラストをつけていただきました。
もうひとつのモモモの世界をお楽しみください

画像は順次掲載していく予定です。

住良木大地さん イラストサイト「ちっさいのがすき」

http://homepage2.nifty.com/sda_ichi/

【漢字の読み対象年齢：小学1年生以上】

トツペじいさんとモモモのうんち

> i 5 4 7 4 | 3 6 1 <

ふるい、ふるい、トネリコの木のじいさん。

名まえをトツペ といいます。

みんなは、トツペのことをトツペじいさんとよんでいます。
でも本とうは、ばあさんなのかもしれませんよ？

「わしはただのトツペだ！ ちかくにつれあいがあるわけじゃなし、
じいさんでも、ばあさんでも、そんなのはどっちだっていい！」

そうですか、そうですか。

あんまりきくとえだをゆらしておこるので、これいじょうの
しつもんはやめておきましょう。

こんなふうに、きむずかしやのトツペじいさんですが、
じいさんがいるのは、小さながけのつつきです。
がけの下には、ほそいみちがはしっています。

そのむかし、そのほそいみちをいった先には、大きくてふるい森と
そのまたおくには、小さな村がありました。

さて、トツペじいさん。

大きな森があるというのに、なぜひとりで、がけの上になんか
いるのでしょうか？

きむずかしやだからでしょうか？

ちがいます。

そのむかしのむかし、おおむかし。

トツペがまだじいさんではなく、かわいい子どもの木だったころ。

このがけのとつつきにトツペをうえた木こりがいたのです。

木こりは三人いて、なかよくならんで大きな森までやってきました。

「やあ、ここはふかくていい森だなあ」

「やあ、でもすこし木のげんきがないみたいだ」

「やあ、じゃあぼくたちでいらぬ木をきろうじゃないか」

三人の木こりはそうだんしました。

「まい日、ここまで来るのはたいへんじゃないか？」

「まい日、いえにかえるのもたいへんじゃないか？」

「まい日、きつた木をまちにはこんでゆくのもたいへんじゃないか？」
「？」

三人の木こりはまたそうだんしました。

「じゃあ、ここにいえをつくらうじゃないか」

「じゃあ、しごとをするいえもつくらうじゃないか」

「じゃあ、もうすこしなかまもよんでこようじゃないか」

三人の木こりはまたまたそうだんして、ここに木こりの村をつくることにきめました。

「またこの大きな森に行くことができますように」

「またこの大きな森にきたときに木がかれていませんように」

「またこの大きな森にきたときに、みちにまよったりしませんように」

三人の木こりはかおを見あわせました。

「そうだ！ ほくらにだけわかる、目じるしの木をうえていこう」

「そうだ！ 目じるしの木を、森からもらってうえていこう」

「そうだ！ 森からもらって、がけの上にその木をうえていこう」

三人の木こりは日のひかりの入らない、くらい森に入りました。うっそうとした森の中は、みんなせたけの大きな木ばかりで、なかなか三人の木こりのお目かねにかなう小さな木がありません。やがて、目のまえにきれいなお花ばたけがあらわれました。

「すてきだね」

「すてきだね」

「すてきだね」

三人の木こりは目をほそめると、花のかおりをむねいつぱいに
すいこんで、ちいさないずみで水をごくごくのみました。

> i 5 4 7 5 | 3 6 1 <

「さて、ゆこうか」

「さて、ゆこうか」

「さて、ゆこうか」

三人の木こりはくらい森の中をどんどんあるいてゆくうちに、
ぼうつとひかる、手ごろで小さな木を見つけました。

「やった！ トネリコの木だ！ 白くて、はいろな木のいろが
よく目立つなあ！」

「やった！ トネリコの木なら、きつと大きくなるぞ！」

「やった！ トネリコの木を、小さながけにうえようじゃないか！」

よきました！

三人は、ぼうつとひかるその木のねっこを土からていねいにほり出
して、

えっちらおっちら、小さながけの上まではこんでゆきました。

> i 5 4 7 6 | 3 6 1 <

ちいさながけの上は、土がかたくて草ぼうぼうです。

おまけにだれかが空けた、小さなあながいくつもいくつもありませんた。

「おや、うさぎのあなた」

「おや、ここはうさぎのいえだったのか」

「おや、あそこにいるのは、あなのもちぬしのうさぎじゃないか？」

三人が草むらを見ると、三匹のうさぎがこちらをのぞいていました。

「おーい、うさぎさんたち」

「おーい、これはきみたちのいえかい？」

「おーい、ここになかまをふやしてもかまわないかい？」

三匹のうさぎはかおを見あわせると、ぴょんぴょんぴょんとなかよく草むらからとび出て来ました。

右がわの耳がたれた、白うさぎ。

左がわの耳がたれた、くろうさぎ。

りょうほうの耳がたれた、ちやいろうさぎ。

三匹のうさぎは三人の木こりのそばまでとびはねてくると

三人の木こりがえっちらおっちらかかえてきた、ちいसान木をながめました。

「これはトネリコの木だよ」

「これは大きな木になるよ」

「これはきみたちのいえの目じるしになるよ」

三匹のうさぎはくびをかしげています。

だって、目じるしはなくなつて、うさぎはじぶんのいえがわかるのですから。

三匹のうさぎは、そろってくびをよこにふりました。

三人の木こりは、あたまをかきかき、いいました。

「ごめん、これはぼくたちのためにひつようなんだよ」

「ごめん、これはぼくたちがまたここにくるためにひつようなんだよ」

「ごめん、これはぼくたちがもじゃもじゃの森をきれいにするためにひつような目じるしなんだよ」

三匹のうさぎは、かおを見あわせました。

三人の木こりは、手をたたいていいました。

「そつだ！大きな森のおくにはすてきなお花ばたけがあるよ」

「そつだ！大きな森があかるくなれば、お花ばたけにゆけるよ」

「そつだ！お花ばたけには、きれいないずみもわいていたよ」

三匹のうさぎは、ふたたびかおを見あわせました。

そして、三人の木こりがかかえてきた、小さな木を見つめました。

「モ」

「モモ」

「モモモ」

そういうと、三匹のうさぎはぴよんぴよんと、がけの上にもかかってとびはねてゆきました。

「なんだろっ?」

「なんだろっ?」

「なんだろっ?」

三人の木こりはかおを見あわせると、三匹のうさぎのあとをおいかけて

えっちらおっちら、小さな木をがけの上まではこんでゆきました。

三人の木こりががけの上までたどりつくと、三匹のうさぎはそろっていっしょうけんめい、まえ足やあと足で土をほっているところでした。

とちゅうですこしうさぎのあながこわれました。

でも、モモモのうさぎはあなほりをやめません。

だいが、うさぎのあながこわれました。

でも、モモモのうさぎはあなほりをやめません。

とうとう、じめんに大きなあながあきました。

モモモのうなぎはあなほりをやめ、あなの上にぴょんぴょんととびだしてきました。

「モ」

「モモ」

「モモモ」

三匹のモモモのうなぎはそういうと、三人の木こりといっしょにトネリコの木の中をそのあなに入れ、ていねいに土をかけました。

「そうだ！　せつかくの目じるしだ。なにか名まえをつけなくちゃ」

「そうだ！　ここはがけのつつきだ。なにかいい名まえはないかなあ？」

「そうだ！　トツペはどうだろう？　とつつきトネリコ、トツペの木だ」

「そうしよう！　そうしよう！」

そういうと、三人の木こりは目じるしになった子どものトネリコの木に

トツペと名づけ、モモモのうなぎに手をふって、がけの下のほそいみちを

あるいてかえってゆきました。

モモモのうなぎは、それはそれはていねいにトツペのおせわをしま

した。

雨の少ない日にはお水をあげ、草ぼうぼうのトップのまわりに生えた草は、ぜんぶじぶんたちできれいにたべました。

いえの中から、ねっこがびょうきになっていないかしらべます。

いつのまにか、トップとモモモのうさぎたちは、かぞくのようになかよくなっていました。

そこへ、三人の木こりがまたがけ下のほそいみちをやってきました。

「やあ！ トップ、ひさしぶり！ ずいぶんりっぱな木になったねえ」

「やあ！ トップ、きみはりっぱな目じるしになってくれたよ」

「やあ！ トップ、これでぼくらもまよわずにここまでくられるよ」

木こりたちのこえに、モモモのうさぎはびよこびよこびよこつとトップの木のかげからかおを出しました。

「モ」

「モモ」

「モモモ」

三人の木こりたちと、三匹のモモモのうさぎは、さいかいをよろこびました。

やがて、三人の木こりは、ほかの木こりたちをよんできてふかい森におのを入れ、森の中をすこしだけきりひらいて、

そこに小さな村をつくりました。

村のひとたちは、みんな木こりのしごとをしています。村をかこむ大きな森から、そだちすぎた木をきって、町にはこんでは、お金にかえてくらしています。

やがて、ちいさな村にはつきつぎに子どもが生まれ、やがて、きゆうくつな村になってきました。

村のひとたちはあつまってそうだんしました。

「これじゃ、しごとがしづらいなあ」

「ひともふえたし、子どものがっこうもつくらなきゃ」

「じゃあ、もうすこし。もうすこしだけ、森をきりひらこう」

三人の木こりも、そのあつまりにいましたが、もう三人だけではものがきめられません。三人の木こりは森の木をきることをモモモのうさぎがはんたいしないか、しんぱいでしたが、とうとう森の木はすこしだけきりひらかれることがきまってしまいました。

「なあに、うさぎのあなはずいぶんとおくだ。トツペの木さえきりたおさなければだいじょうぶだよ。さあ、はじめよう」

トン カン トン トン カン トン トン
トンカ トンカ トトン トトン カカン カカン トトン

森の中からたくさんの音がきこえてきます。

モモモのうさぎは耳をぴんとすませて、森のほうをながめました。やがて音はやみ、小さな村はほんのすこしだけ大きな村になりまし

た。

それからずいぶんながいときがながれ、すこしずつ、すこしずつおのの音がひびくたびに、森は大きな村にたべられてゆきました。村のひとはお金もちになり、トツペの目じるしは、いろんなひとのやくに立っています。

モモモのうさぎはただじつと、すっかりじいさんになったトツペといっしょに、がけの下をとおってゆく村のひとたちと、きられて町にはこばれてゆく、森の木をながめていました。

「なあ、さいきんちよつと木をきりすぎていないかい？」

だれかがそういいはじめ、また村のひとたちはあつまってそうだんしました。

三人の木こりはもうすっかり年をとって、耳がとおくなり、足もよぼよぼになってしまって、あつまりにさんかすることはできません。

「なにしろ、村のまわりはきりかぶだらけだ。あれじゃあはたけもつくれない」

「どうだろう？ やきはたにしてみては？」

「そうだね。木のねっこはほるのがたいへん。火をつけて、きりかぶをもやしてしまおう」

三人の木こりがもしこれをきいていたなら、もちろんはんたいしたでしょう。

それとも、そうしようそうしよう。と、うなずいたかも

しれません。

村のひとたちはみんなそろって、森をすこしだけでもやすことにきめました。

きりかぶになってしまったふるい森の木々たちが、ほのおの中でたくさんひめいをあげています。火はどんどんもえうつって、やがてふるい森ぜんたいへとひろがってゆきました。

村のひとたちは、おおさわぎ。あわててきれいなはずみから水をたくさん、もえる森にかけはじめます。

めらめら、ぱちぱち、ぐうぐうぐうぐう！ ぱりぱりぱりぱり！

森はどんどんもえてゆきます。いずみの水ではとてもとてもまにあいません。

村のひとたちはみんな、にもつをかかえていちもくさんにもえる森からはしつてにげてゆきました。

トツペじいさんとモモのうさぎも、ちいさながけのうえからもえる森を、だまって見ていることしかできません。

ふつかたち、みつかたち、森をもやしつづけたほのおは、ようやく小さくなってきえました。

「おまえたち、いい子だからわしのねっこをかじっておくれ！」

ついに、トツペじいさんが大ごえを出しました。

トツペじいさんは、えだをぶんぶんならしておこっています。

モモモのうさぎがねっこのまわりでぴよんぴよんはねると、
トツペじいさんは、とうとう大ごえでなき出しました。

「木こりはわしをここにうえた。木こりはわしを目じるしにした。
木こりはわしを目じるしに、森の木をきつてとおい町にどんどん
はこんで、とうとうふるくて大きな森をまるごとぜんぶだめにした。
わしはあのなつかしいふるくて大きな森の、さいこの生きのこりだ。
森はしんだ！ わしだけがのうのうと生きているのはがまんがなら
ん！
だからわしのねっこをかじれ！」

トツペのいかりに、モモモのうさぎはぴよんぴよんとはねまわりま
す。
やがてモモモのうさぎは、やけてしまった森のほうに、三匹いっし
よに
とびはねていつてしまいました。

トツペじいさんは大ごえでなきつづけ、やがてなみだはとまりまし
た。
じぶんのからだのねもとに、なにかきれいなものが見えます。
トツペじいさんはえだをゆらすのをやめ、じつとじめんをながめま
した。

「やあ、これはどうしたんだ？」

トツペじいさんのまわりには、森のきれいな花ばたけの花たちが、
たくさんたくさん、うわっていました。

トツペのそばには、いつのまにかモモモのうさぎがすわっています。

右がわの耳がたれた、白うさぎのからだは、まっくろになっていました。
左がわの耳がたれた、くろうさぎのからだは、まっ白になっていました。
りょうほうの耳がたれた、ちゃいろうさぎのからだは、まっくろとまっ白になっ
ていました。

「モ」

「モモ」

「モモモ」

モモモのうさぎは、うんとうんとうんと大きくはねて、
トツペじいさんの木のえだにとびのりました。

「なあ、モモモさんせ」

トツペじいさんはつぶやきました。

「わしがいちばんつらいのは、なかまがしんだことじゃない」

「わしのなかまをしなせた木こりは、木をきりたおす目じるしのため
にわしをここにうえた。

じゃがそのおかげで、わしはあの日のひかりのとどかない森の中で、
くちはてることもなく、なかまのようにほのおの中でくるしんで
しぬこともなく、こうして今も生きておる。

そのことをおもつと、とてもつらいが、それでもわしはまだまだ

生きてゆかねばならん。わしはな、こうしていつもがけの上において、おまえさんたちがいつもそばにいてくれてよかったとおもっておるよ。

森からつれて来てくれた、花もきれいで、うれしいわい」

「モ」

「モモ」

「モモモ」

モモモのうさぎも、トツペじいさんのえだの上でぴよんぴよんぴよんとはねました。

「おお、おお。えだがおれてしまっじゃないか」

さきほどまでなっていた、トネリコのトツペじいさん。

こんどは大ごえでわらいました。

ふるくて大きな森はきえて、そこにははたけができました。

はたけもいつかなくなつて、そこにはいえができました。

いえもいつかなくなつて、そこはのはらになりました。

のはらには木のめがのびて、またいつかふかい森になるでしょう。

だあれもおぼえていなくても、だいじょうぶ、だいじょうぶ。

トツペじいさんとモモモのうさぎは、ちいさながけのとっつきからそのようすを、じつと、じつと、じつと、じつと、みていますからね。

おしまい

(後書き)

お読みくださりどうもありがとうございました (^^)(

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3018i/>

トッペじいさんとモモモのうさぎ

2010年10月11日09時26分発行